

地域共生社会時代の社会福祉士養成に向けた 産官学が協働して取り組むプラットフォームの構築と 教育プログラムの試行的開発

越 智 紀 子

本稿は、地域共生社会時代の社会福祉士養成及び近年のコロナ禍における実習教育の課題を背景に、産官学が協働して取り組むプラットフォームの構築と新たな教育プログラムの試行的開発として、「スタディツアーよさの」の実践と効果について報告するものである。

コロナ禍の実習を経験し、本プログラムに参加した学生へのインタビューから、その教育的効果を分析したところ、本プログラムを通して「自己の変容」が経験され、「大学で学んだ知識と実践の統合的理解」が得られていた。また、「実践者としての態度・価値観」や「社会福祉士に必要とされる実践力」の形成・獲得が促進されていた。コロナ禍の社会福祉実習で課題となっていた「地域への働きかけ」についても学ぶ経験が得られていた。これらにより、本プログラムが社会福祉士の養成教育の機能拡充に役割を果たせることが示唆された。

キーワード：社会福祉士養成教育、地域連携教育、省察的学習

This paper reports on the progress and effects of the “Study Tour Yosano” as a platform for industry-government-academia collaboration in an attempt to develop a new educational program to train social workers who can realize a community symbiotic society against the background of the spread of new coronavirus infection.

Analysis of interviews with participants, indicated that the program was effective in promoting “self-change” and “integrated understanding of knowledge and practice learned at university,” formation and acquisition of “attitudes and values as a practitioner” and “practical skills needed as a social worker”. It was also suggested that “community outreach,” which is difficult to learn in practical training education at the time of the new corona expansion, could be learned through this program and play a role in expanding the functions of social worker training education.

Key words : Training and education for social workers, Community Collaboration Education, Reflective Learning

I. 問題の所在と背景

近年、「地域共生社会」の実現が目指され、「地域」に焦点を当てた政策が次々と打ち出されている。厚生労働省（2021）によると、「地域共生社会」とは、「制度・分野ごとの『縦割り』や『支え手』『受け手』という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの

暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会」とされる。しかし、現状において、それらを具現化する福祉専門職は十分には確保されていない。

2018年3月に社会保障審議会福祉部会福祉人材確保委員会から出された「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割等について」（以下、報告書）では、地域共生社会の実現を推進し、新たな福祉ニーズに対応するためには、ソーシャルワーク機能の発揮が必要であることが

示され、社会福祉士には、ソーシャルワークの専門職として、地域共生社会の実現に向け、多様化・複雑化する地域の課題に対応するため、他の専門職や地域住民との協働、福祉分野をはじめとする各施設・機関等との連携といった役割を担っていくことが期待されている。

これに伴って、社会福祉士養成教育のカリキュラムの内容も見直された。今後社会福祉士がソーシャルワークの専門職として、地域共生社会の実現に向けて担うべき役割を理解し、多機関連携による包括的な相談支援体制の仕組み等の知識を習得する必要性から、新たに「地域福祉と包括的支援体制」の科目が創設されたほか、地域における福祉ニーズや多職種・多機関協働、社会資源の開発等の実態を学ぶため、機能の異なる2つ以上の実習施設で実習を行うこと、実習時間についても従来の180時間から60時間の増となる240時間に拡充されることとなり、2021年4月、新たな社会福祉士養成教育のカリキュラムが施行された。現在、地域共生社会の実現に中心的な役割を担い、地域課題の把握や社会資源の調整・開発、ネットワークの形成など、地域への働きかけや他職種との連携も視野に機能を発揮できるよう、より実践能力の高い社会福祉士の養成が目指されているところである。

ただ一方で、「実習時間を増やし、複数分野での実習を経験するという新カリキュラムだけに基いた養成教育だけで、制度横断的な課題への対応や社会資源の開発といった役割を担える実践能力を身につけたソーシャルワーカーを育成できるとは考えにくい」（小久保他 2021, p23）という指摘もある。小久保らは「地域のさまざまな立場や分野の関係者が連携・協働して学び合い、ソーシャルワーカーが活動できる場を創出していくこと、すなわち、地域レベルでの『教育と実践の一体的展開』がソーシャルワーカー養成教育の今日の課題となっている」（小久保他 2021, p23）と述べる。

この点について、前出の報告書では、「地域共生社会の実現に向けて、その担い手となる社会福祉士の育成に当たっては、職能団体、養成団体、事業者、行政、地域住民等の地域の関係者が連携・協働して学び合い、地域の実情を踏まえて取り組む

ことが重要である。このため、職能団体や養成団体等が中心となって地域でソーシャルワークの機能が発揮されるような取組の推進を検討すべきである」（厚生労働省 2018, p6）とされ、「地域共生社会の実現に向けて必要となる包括的な相談支援体制及び住民主体の地域課題解決体制を構築し、対象者の属性に関わりなく、多様化・複雑化した地域の課題に対応できる社会福祉士を育成するためには、職能団体、養成団体、事業者団体が協働して社会福祉士の育成に取り組むだけでなく、行政、地域住民など、地域の様々な立場や分野の関係者が連携・協働して学び合いや活動の機会を設けていくことが重要である」（厚生労働省 2018, p12）と記されている。また、こうした地域全体での社会福祉士育成の取り組みは、社会福祉士の養成教育における「実習」と社会福祉法人の「地域における公益的な取組」を協働で展開することによって、養成校の資源（教員・学生・施設）を活用しつつ、現任の社会福祉士にとっては、実習指導者として所属組織の承認のもと、実習生とともに地域における公益的な活動に取り組むことができ、実習生にとっては、社会福祉法人が果たすべき地域アセスメントの方法等を学ぶことができることから、「地域に強い」社会福祉士の育成・養成につながることで、さらには法人側にとっても学生が社会福祉法人に就職しようとする動機付けにつながる等の相乗効果が期待できるとの意見も出されていた。近年、社会福祉法人において「地域における公益的な取組」が責務として規定されたことや、大学においても「地域連携」が重視され、地域との連携による教育機能の強化が目指されていることから、今後さらに地域と連携した養成教育モデルや地域人材の養成のしくみが求められるとも考えられる。

しかし、2020年から続くコロナ禍においては、新型コロナウイルス感染症の拡大が繰り返されるたび、社会福祉実践の現場は難しい対応を迫られ、学生もまた実習、授業、課外活動等において社会福祉実践の現場との関わり合いを持ちにくい状況が続いている。例えば、筆者は2016年度より花園大学社会福祉学部において、京都府が行う「京都府北部福祉フィールドワーク事業」*1を活用し、

京都府北部地域の社会福祉法人・事業所と連携して、学生の資格取得の支援やフィールドワークを通じた学習モデルに関する教育実践研究に取り組んできたが、2020年以降はこれらのプログラムの実施も難しくなった。

社会福祉士の実習では、日本ソーシャルワーク教育学校連盟が2021年に実施した調査によると、社会福祉士（精神保健福祉士も含む）養成校の半数以上が、2020年度に新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、実習を延期したり、代替プログラムでの対応を実施していた。（日本ソーシャルワーク教育学校連盟2021）。また、筆者が分析した2020年度のコロナ禍における相談援助実習の教育評価では、実習生の2割において、実習期間が短縮され、代替プログラムでの対応が必要となっていた。さらに、実習期間の短縮の有無によって、実習での経験率や達成度・理解度の評価に差が生じており、その差は特に、『地域への働きかけ』の項目で顕著であった。また、現場での実習ができたとしても、「利用者との対面でのかわりや時間には制限があった」「行事や地域活動が中止になり、経験できなかった」等の実態も報告されていた（越智2022）。

今後、社会福祉士が地域共生社会の実現に向けてソーシャルワーク専門職としての役割を担うのであれば、このような実態や課題への対応やコロナ禍の実習を経験した学生の視点に立った学びのしくみづくりが必要であり、それは養成校としての責務でもあったと考えられる。特に、近年重視される「地域への働きかけ」が十分に学べていない現状があるとするれば、地域におけるソーシャルワークを学ぶのに有効な教育プログラムやコンテンツを開発し、4年間の養成教育の中に広く長期的に組み込むことによって、新型コロナウイルス感染症等のリスクマネジメントともなるほか、学生一人一人がその発達段階やニーズに応じて現場で学ぶことができる環境が整うなど、養成教育の機能拡充にも貢献できると考えられた。

このような問題の所在と背景により、2022年度より、京都府与謝野町と連携し、産官学が協働して取り組む地域共生社会時代の社会福祉士の養成に向けたプラットフォームの構築及び教育プログ

ラムの開発に取り組むこととなった。本稿では、京都府北部福祉フィールドワーク事業及び大学別受入事業を活用して試行的に実施した「スタディツアーよさの」の実践を報告するとともに、本実践が今後どのように社会福祉士養成教育に寄与できるのか、教育的効果を考察する。

II. 「スタディツアーよさの」実践報告

1. 「スタディツアーよさの」概要

(1) 実施日・参加者

2022年8月5日（金）、「スタディツアーよさの」を実施し、花園大学社会福祉学部・社会福祉士養成課程の2年生から4年生の13名が参加した。引率教員として筆者が同行した。

(2) プログラムの目標

「スタディツアーよさの」では、事前・事後学習を含め、以下のような目標を立てた。

- ・地域の人々の暮らし、地域の特性を知る。
- ・実践者や地域の人々と対話や関わりを通じて、福祉の役割を考える。
- ・実際に地域の拠点等を体験し、なぜこの地域にこのサービスが必要とされているのかを考える。
- ・行政職員、社会福祉施設職員と出会い、それぞれの立場性や福祉への関わり方を知る。
- ・プログラムの経験を通して、自分たちがこれから福祉にどのように関わっていくかを考える。

(3) 与謝野町の特徴と「福祉のまちづくり」

与謝野町は、京都府北部・丹後地域に位置する人口約2万人の町である。大学からはバスで約1時間半の距離にある。豊かな自然に恵まれ、南北約20キロメートルの範囲に町並みや集落が連なるまとまりのよい地域で、一日の行程でも町の全体像を調査しやすい学習環境にある。

「全ての町民が生活しやすい福祉のまちづくり」を掲げ、積極的な福祉政策が展開されてきたことから福祉資源も多く、「産業としての福祉」が持続可能な地域の発展を支える側面もある。一方、人口減少、少子高齢化、地域産業の担い手不足など

の課題は深刻化しており、行政・事業者・地域住民が一体となって課題を共有し、協働して課題解決の方向を見出そうと取り組まれている。例えば、午後の活動拠点となった「やすらの里」の整備事業は、与謝野町の福祉のまちづくりにおいて行政・民間事業者・地域との連携の成果として成し遂げられていることが、これまでも数々の報告がなされている（中西 2013、黒田・青木 2014、一井 2019）。

(4) 実施上の課題

実施上の課題として大きかったのは、感染防止対策と感染拡大時の対応であった。延期や中止の判断の他、参加学生の体調管理や感染予防対策、参加人数の変化、現地の状況把握、代替活動等、緊密な連携と調整が求められ、スケジュールやプログラムは当日まで繰り返し協議・検討された。

(5) 手続きと倫理的配慮

2022年度から新たなプログラム開発に取り組むにあたって、「2022年度スタディツアー・インター

ンシップ実習（仮案）」を作成し、2022年5月16日の社会福祉学科・臨床心理学科の2学科会議にて、趣旨と目的を説明し、承認を得た。

本プログラムへの参加は任意とした。与謝野町と協議して案内用の仮プログラムを作成し、2022年6月17日より周知案内を開始して10名程度の参加希望者を募った。参加希望者には、本プログラムの趣旨と目的、費用の負担等について説明し、参加の意思を確認した。

なお、研究の一環として、本実践を報告・公表する予定があること、写真や動画等、活動を記録することについても説明し、同意を得た。また、録音した音声データは、全て匿名化した上でデータ化し、公表することがあること、データについては、厳重に保管し、公表後に破棄すること等を伝え、予め同意を得て実施した。

2. 行程と学習の内容

(1) 「スタディツアーよさの」の行程と学習内容

表1に、「スタディツアーよさの」の行程と学習内容を示す。

表1 「スタディツアーよさの」の行程と学習内容

時間	行程
09:00～10:45	9:00 大学出発。バスにて与謝野町へ移動。 10:45 頃 岩滝ふれあいセンターに到着
11:00～11:30 11:30～11:50	町長と意見交換 参加者の意見のシェアリング
11:50～移動 12:00～12:50	やすらの里 地域交流スペース 昼食（ワークセンター花音）
13:00～15:30	やすらの里地域交流スペースにて活動 13:00 与謝野町の福祉政策について（講義） （与謝野町福祉課長） 13:15 地域包括支援センターの活動説明（講義） （与謝野町（直営）地域包括支援センター保健師） 13:30 やすらの里見学と説明（見学・意見交換） ・生活リハビリ道場 ・ワークセンター花音 ・やすらの詩 ほか。 14:30 グループに分かれて体験活動 【行先】 ・わんぱくクラブ ・リフレかやの里 ・介護ハウスうえもり ・デイサービスわおん ・リハプライド与謝野
15:45:～16:45	全体でのふりかえり
16:45～18:45	16:45 閉会の挨拶 18:45 大学到着

プログラムの限られた時間の中で、学生の気づきや学びを引き出していくために、事前学習、小グループでのミーティング、事後学習を組み込んだ。それらを含む活動期間は、2022年6月24日から2022年9月17日であった。

(2) 事前学習・ミーティング・事後学習

事前学習は、社会福祉士の実習に通じ、与謝野町に関する情報提供ができる「京都府北部福祉フィールドワーク事業」コーディネーター（社会福祉法人大樹会・五嶋仁氏）をゲストティーチャーとして招き、事前学習を行った。内容は、「地域を見る目・福祉を見る目」「京都府北部福祉フィールドワーク事業に参加した先輩たちの学び」「与謝野町の地域と福祉の特徴」「町長からのビデオメッセージ」である。

その他、オフィスアワーの時間等を活用して、小グループのミーティングを設定し、学生一人一人の興味・関心、実習や福祉との関わり方、知りたい・学びたいと思っていること等を確認していった。それらをもとに、学生がプログラム内容を提案することもあった。並行して、参加する学生の交流を図り、積極的な意見交換ができるよう、特に学年を超えた縦の関係形成を意識した。

事後学習は小グループで行い、「スタディツアーよさの」での体験を省察的に振り返った。

3. プログラムの特徴と留意点

(1) 町ぐるみの学生受け入れと地域住民・実践者との対話や関わり

「スタディツアーよさの」は、町ぐるみで学生を受け入れ、行政、福祉実践者、地域住民等が様々な立場で学び合う取り組みである。学生が実践者の話を聞くとといった一方向の学びだけではなく、福祉実践者や地域住民との関わりや対話を重視し、相互作用から学ぶことができるよう、内容を工夫した。

(2) リフレクションとシェアリング

一日の限られた時間で一人が体験できることは限られている。しかし、経験した出来事、気づき、疑問等を多面的な視点で振り返りながら、意味づけを行ったり、参加者間で共有することで、新たな視点や気づき生まれ、学びが深まることが期待できる。午前のシェアリングでは、どのような視点や疑問をもって参加するのかを全体で共有し活動に臨んだ。また、小グループ活動の中でも意識して意見交換を行った。プログラムの最終には、一日の活動の振り返りを全体で行い、それぞれの活動の様子や学びを広く参加者で共有した。

4. プログラムの主な内容と参加者の振り返り

(1) 町長との意見交換

与謝野町での活動は、学生と町長の意見交換からスタートした。学生から出された質問は、①与謝野町としての「スタディツアー」の意義、②「連携」において大切なこと、③地域の「良さ」につ

表2 学生と町長の意見交換の記録

①与謝野町としての「スタディツアー」の意義

(学生)：行政を志望している学生です。私たち学生として、この自然豊かな福祉の町の現場を体験させてもらえることはとてもありたいと考えています。一方で、このように大学生を受け入れて、地域を知ってもらうことの、行政のお立場として、その意義について教えていただきたいです。

(町長)：まず、最初に与謝野町は、福祉分野のさまざまな取り組みを行って参りました。これはひとえに行政と民間事業者の皆さんとの協働の中で作り上げてきたという経過があります。こうした全国に先駆けて行ってきた美しい事例を多くの皆さんに知っていただきたいということが第一であります。一方で、事業所の皆さんのお話を伺うと、各事業所における人材の不足や確保ということが非常に難しいという話をよく聞いています。そうした中で、私達としても、様々な制度をつくり、勉強させていただいてきましたけれども、慢性的な人材不足からの脱却ができていないということでもあります。そうしたことから、皆さん方のように、これからどのような職についていくのか、どのような事業所で学んでいきたいのか、まだ様々な検討段階の学生の皆さん方と、こうした形で意見交換させていただくということは、直接・間接含めて、将来の人材確保に位置づけていくことができたらいいなと思っています。ただ、我々としては、先ほど申し上げたように、この与謝野町で展開してきた福祉のまちづくりのさまざまな支援というものを、できる限り多くのおみなさんに感じていただいで、共感を得ていきたいというように思っています。以上です。

②「連携」において大切なこと

(学生)：今日のお話の中で、事業所や地域との連携ということが出てきましたが、「連携」において気をつけていること、住民のニーズを汲み取る際に留意していることなどを教えてください。

町長：ありがとうございます。社会福祉の分野というのは、自治体における非常に重要な役割の一つだと思っております。なぜ重要かという、住民の皆さんの日常生活に非常に密接に関係しているということでもありますし、それぞれ不安を抱えていたりとか、お困りであるとか、そのような状態にある方々と日々接するということでも、非常に重要な分野だと思っております。そうした中で、住民の皆さんの意向や問題点というものをどのように抽出しているのかということにつきましては、やはり日々の福祉業務の中で住民の皆さん方に働きかけていく、どのような課題があるのか、どのような問題点があるのかということ、その人その人の立場から意見を聴取していくということがまず大切なことだと思っております。そしてもう一つ大切なことが、一人一人の状態というものから「いかに一般化するか」、そうしたフェーズ、思考を広げていくことができるのかということだと思っております。

例えば、今ヤングケアラーとか様々な問題が出てきていますけれども、これはおそらく1つの事例から、ある程度、社会の中でそういう層があるということを知りながら社会問題化した事例だと思っておりますけれども、福祉の分野においては、まだ、明確に名前を付けることができていない状態を指すことがたくさんあると思っております。1つの事例からどのように一般化、社会化できるかということ、その次に重要なことだと思っております。

そうした中で、行政のできるということには限られていると思っております。与謝野町には非常に多くの福祉事業所がありますけれども、そうした福祉事業所の方々と、どのような福祉サービスを提供していけば、住民の皆様方に届いていくのかということ、日々、こうしたつながりの話の中で聞いていくということもそうですし、やはり福祉の最先端にいる現場の事業所の皆様からしっかりと声をうかがうということが非常に重要なことだと思っております。

③地域の「良さ」について

(学生)：与謝野町には、今日、初めて来ることができました。福祉施設をはじめ、与謝野町の良さというものを、どのように考えておられますか。

(町長)：ありがとうございます。先ほど若干、ものづくりの産業が発展したことによって、地域経済が発展したという話をさせていただきました。背景にあるのは、やはり住民の皆さんの意識があると思っております。すなわち、自立性と公共性を備えた住民の皆さんがここに住んでくれているからこそ、この与謝野町の良さがあるのだと思っております。

自立性とか公共性がどのようなところに息づいているのかということですが、与謝野町は人口2万人の小さい町ですけれども、町内には1300を超える事業所があります。これは福祉の事業所であったり、織物の事業所であったり、一般的な商用的なサービスを営んでおられる事業所も含まれますけれども、これが何を意味しているのかといえますと、やはり自分の人生を自分で切り開いていくという思いを持つ人たちが多いのだらうなと思っております。

もう一つの軸として公共性ということを申し上げましたけれども、この与謝野町を含む丹後半島というのは、織物の非常に有名な生産地で、絹織物については日本一の生産地であります。なぜここまでになったかということ、自分が開発した技術を知的財産で囲うというのではなく、「地域発展のためにみんなで使っていこう」ということで惜しげもなく、そのノウハウや技術を開放していったという経過があります。そうしたことから、いかに住民の皆さん方が公共的な利益のために、これまでの取り組みを行ってきたということが透けて見えるように思うのです。ですから、自立をするという意識があるということに加え、やはり地域全体を考えた時に、自分が公共的に貢献できるかということを考えられるか、そうした町民性があるからこそ、先ほど申し上げたような与謝野町の良さというものが輝いているというように思います。

④住みやすいまちづくりについて

(学生)：京都府北部出身者です。与謝野町は住みやすい町だと思うのですが、「住みやすい町にするために」にどのようなことを意識されていますか。

(町長)：ありがとうございます。昨年度、大東建託が行っている全国の住み続けたいランキングの中で、京都府の中では与謝野町が1番でした。関西圏の自治体の中でも9番の順位でした。これはどのように調査されているのかということ、その市町村に住んでおられる一定の方に電話などで調査を行って、その調査結果に基づいて順位付けをされているという、そういう調査の内容なのですが、そこで住み続けたい町として大きい評価をいただいたのが昨年の評価でした。住み続けたい町だと住民の方に思っていた背景としては、さまざま考えられると思います。ただ昨年、一昨年はコロナ感染症の影響下にあるということで、私としては社会的な動向がその要因にあげられたのかと思っております。つまり、与謝野町という町は大変に美しい町ですし、支え合いの精神が息づいている町です。ただ、(コロナ禍によって)みんなにある程度の時間ができて、どこかに行くという行為がなくなったことで、地域と地元を再発見した時期だったのかなと思うのです。改めて自分の町を見た時に、ふと車の窓から見える風景が美しいなとか、伝統が息づいた町だなとか、隣のおじいさんとおばあさんとこの地域と一緒に暮らしているんだなとか、その実感というものがあるのが住民の皆さんの中にあっただけかなと思うのです。ですので、昨年度の調査結果についてはそうなんですけれども、もともと与謝野町には、人が過ごしやすいと思える環境、つまり自然が豊かであったり、近隣住民の方とのいわゆる支え合いができていたりとか、自分のルーツを伝統とか産業に見出すことができるとか、いくつかの要素がこの町にあったからこそ、住み続けたい町として評価をされたのだと思っております。

ただどのような町に住んでみたいのか、住み続けたいのかということは、人によって尺度が違うと思っております。今日も皆さん、たぶん様々な背景の中で来られていると思うんですけれども、重要なのは、たぶん、自分でその軸を探していくということが重要なのではないのでしょうか。つまり、仲のいい友達がある程度近くに住んでいるところに住みたいとか、自分の出身地やお世話になっている人たちと一緒に暮らしていきたいとか、たぶんね、いろいろな尺度があると思うんですけれども、置かれた場所、置かれた場所で咲ける人になってほしいと思います。つまり、置かれた場所で、その場所の良いところを見つけて、自分もそこに貢献していくのもいいし、そういう視点をもってもらえると、どこにいても楽しい町になっていくのかなと思います。少し回りくどい表現をしましたが、以上です。

⑤学生への願い

(町長):先程、「これから行政に携わって福祉をしていきたい」という話がありましたけど、ここに今日来てくれている皆さん方はいかがですか。

(学生):私は、障害児とか児童の方に関わっていききたいと思っていますところ です。

(町長):福祉にどうかかわっていくのかというところでは、多分それぞれだと思います。行政側で携わっていきこうと思っている方がいらっしゃるのであれば、先ほど申し上げたように、ある事象を一般化していくことの力を、是非つけてもらいたいと思いますし、また現場でまさに利用者の方々とともに福祉をつくりあげていきたいという思いの方がいらっしゃれば、そういう人たちの心に寄り添える優しい人として、これからも生きていってもらえたらと思います。そして皆さん方がこの一日を通じて、何かしら得て帰っていただけるように、今日は福祉課の職員さんや事業者の皆さん方にお手伝いいただきますので、この行程のなかでさまざま疑問に思うことがあったら、積極的に尋ねていただいて、力にしてもらえると嬉しいなと思っています。今日はありがとうございました。

いて、④「住みやすいまちづくり」に関するものであった。また、最後に、⑤町長から「学生への願い」が語られた。表2に意見交換の内容を報告する。

(2) やすらの里・ワークセンター花音

午後の活動は、「やすらの里」を拠点とした。「やすらの里」は、丹後織物工業加工場の跡地を町が買い上げ、社会福祉法人よさのうみ福祉会、社会福祉法人与謝郡福祉会、特定非営利活動法人丹後福祉応援団、公共社団法人京都府看護協会の4法人が運営する地域福祉の拠点である。業種や運営主体の枠を超えて、同じ敷地の中に、特別養護老人ホーム、デイサービス、ショートステイ、訪問看護ステーション、高齢者賃貸住宅、障害者就労系事業所、カフェスペース、交流スペース、施設内保育所が一体的に運営され、共生型福祉施設の先駆的事例としても注目されてきた。

障害者就労支援B型事業を行う「ワークセンター花音」で昼食をとり、「与謝野町の福祉政策について」(与謝野町福祉課長)、地域包括支援センターの活動説明(与謝野町直営地域包括支援センター保健師)の講義を受けた。その後、小グループに分かれて、やすらの里で運営されている施設・事業所(生活リハビリ道場、ワークセンター花音、やすらの詩など)を見学し、説明を受けた。見学後は、実践者と活発な意見交換が行われた。2年生の振り返りでは、「やすらの里の案内をしていただいた際に、利用者さんが挨拶してくれたり、声をかけて下さって、笑顔がたくさん見られたのが印象的でした」、「利用者さんにとって笑顔になれる場所なのだと感じ、雰囲気が良いなと思いながら施設内を巡っていました」、「施設の中に保育園が

あったのがとても印象的で、小さなお子さんがいる職員さんも働きやすそうだな、産後の復職もしやすそうだなと感じました」等の感想が出された。

(3) 小グループに分かれての体験活動

参加者の希望によって、「子ども(療育)」「障害者」「高齢者」の3領域・5グループに分かれて、地域での体験活動を行った。行先は、「わんぱくクラブ」、「リフレかやの里」、「介護ハウスうえもり」、「デイサービスわおん」、「リハプライドよさの」である。終了後は、やすらの里に戻り、参加者、関係者全員で活動の振り返りを行った。

コロナ禍の影響を受けて、大学の授業では施設見学等ができていないため、2年生の多くは、今回のスタディツアーが初めての実践現場の体験となった。2年生は、どのようなことを感じ、考えたのだろうか。以下に、振り返りの一部を紹介する。

「午後からの活動で行った、認知症対応型のデイサービス『介護ハウスうえもり』さんが1番印象的でした。うえもりさんでは『利用者さんに笑顔の日常を』というのをモットーに、家ではできないことをここに居る時はあえてやるということ大切にされていて、実際に買い出しに行ってお昼ご飯を作ったり、海までドライブに行ったりしていて、利用者さんのやりたいことや気持ちに寄り添って職員さんが接していらっしゃるのだと感じましたし、利用者さんのご家族も安心してデイサービスを利用できるだろうなと思い、とても印象に残りました。また、建物自体が古民家を改装して作られていて家のような雰囲気が感じられ、利用者さんもテレビを見ている方がいたり、誕生日会の飾り付けを

作っている方がいたり、とてもリラックスして過ごされているというのが印象的でした。]

「子どもさんが自主性をもって考えたり動いたりすることを重視して、心の発達を目標にしているということで、山に行ったり海に行ったり、学童さんが自由にやりたいことをするというので、今回は海に行きました。その中で、例えば市内では社会資源がたくさんあって、いろんな医療機関につながることができるけれど、与謝野町では医療をつなげるのにも、舞鶴市まで行かなければならないということでした。医療がつかないというのは課題になって、(職員さんは)言うておられたのですが、ただ、例えば自由に海で遊んだり、楽しんだり心の発達につながるし、京都市内に比べてみても、与謝野町だからこそできることにも気づきました。今日はコロナ禍でふれあいがあまりできなくて、そのことは残念でしたが、でもこうやって子どもさんと話して関わってみないとわからないことはあるし、今回のスタディツアーとかボランティアとかそういう活動に参加して、実際に自分が関わってやってみてわかっていくことが、福祉に関わっていこうとする上では必要だなと思いました。」

Ⅲ. 社会福祉士養成教育における本実践の効果と役割

1. インタビュー調査

(1) 目的・対象者・手続き

本実践の教育的効果を考察することを目的とし、本プログラム終了後、『「スタディツアーよさの」を通して感じたこと・考えたこと』について、半構造的インタビューを行った。対象者は、昨年度までにコロナ禍の実習を経験した4名の参加者である。インタビュー実施期間は、2022年9月13日から9月17日、インタビューに要した時間は1名あたり1時間から1時間半であった。なお、社会福祉士実習を行った分野は、社会福祉協議会が1名、高齢者領域が2名、児童領域が1名であった。そのうち、コロナ禍の影響による実習期間の短縮

があった学生は2名であった。

(2) データの分析方法

インタビュー内容は、本人の了承を得てICレコーダーに録音し、インタビュー後に逐語録を作成した。逐語録を読み込み、質的記述的方法で分析した。分析は、インタビュー対象者が『「スタディツアーよさの」』を通じて感じたこと・学んだこと』について、どのように語り、受け止めているかに留意しながら、意味のある文節あるいは段落ごとに切片化して、コード化し、類似性と相違性を検討してサブカテゴリを生成し、抽象度を上げてカテゴリの生成・分類を繰り返した。

(3) 倫理的配慮

対象者には、口頭および書面にて研究の趣旨と依頼内容を説明し、同意を得た。さらに、インタビュー当日、改めて研究への参加協力は任意であること、協力の有無や内容が成績等の評価に影響することはないこと、匿名性の保護と成果の公表等について説明し、同意を得られたことをもってインタビューを実施した。なお、逐語録及び研究結果については、後日対象者に内容の確認を依頼している。

2. 結果

『「スタディツアーよさの」』を通じて感じたこと・考えたこと』は、21個のサブカテゴリから構成される4つのカテゴリに分類された。4つのカテゴリは、【自己の変容】【大学で学んだ知識と実践の統合的理解】【実践者としての態度・価値観】【社会福祉士に必要とされる実践力】とカテゴリ名を付与した。表3に、カテゴリ、サブカテゴリ、コードの例を示す。以下、カテゴリは【】、サブカテゴリは<>、学生の語りを「」で説明する。

(1) 【自己の変容】

【自己の変容】カテゴリは、<ものの見方の変化><価値観の変化><社会課題への関心の高まり>の3個のサブカテゴリから構成された。

「障害のある方の家族でもう少し肩身の狭い思いをしている方が多いイメージがあると思うん

表3：「スタディツアーよさの」を通じて感じたこと・考えたこと

【カテゴリー】	<サブカテゴリー>	コードの例
自己の変容	ものの見方の変化	障害のある方の家族ってもう少し肩身の狭い思いをしている方が多いイメージがあると思うんですけど、そんな感じではなくて、皆さん生き生きしているな
	価値観の変化	障害者だからって言ったり、健常者だからっていたり、そういう壁がやっぱりあると思うんですけど、入ってみたら面白いし楽しい
	社会課題への関心の高まり	(孤独死とか、高齢化率とか、年金の支え方とか) そういう現実味のあることから目をそらすことができないと思ったし、何かしらそういうことに関心をもっていけるのは良かった
大学で学んだ知識と実践の統合的理解	地域の人々と暮らし	地域として移動が難しく、高齢者の方々が集まるっていうのはそもそも大変
	地域における施設の役割と機能	地域の高齢者の方々がそうやって集まって、身体を動かしつつ、お互いができるようになったこととかを刺激し合いながら、コミュニケーションの場にもなっている
	施設と地域のつながり	隣にはカフェがあって、そこで一般の方と利用者さんが話す機会がある、人づきあいがある
	他の分野・領域の業務や支援	(利用者さんの)水分摂取量をミリリットル単位できっちり測っていて、その理由も聞かせてもらって、医療の支援の様子を知ることができた
	社会福祉士の業務	例えば、あることが一時間の面接で決まるのか、日頃のやりとりの中で決まっていくのか、そういうこともわからないわけなので
実践者としての態度・価値観	与謝野町の福祉のまちづくりとその効果	与謝野町に住んでいて良かったみたいな感じがしましたし、そうやってずっと地域でいられるっていうのは、やっぱりいいなと思います
	実践者としての態度	ちゃんと町のことをわかって、この活動をしよう、こういう人のためにこういう施設を作ろうっていう
	地域の個性の理解	その地域に合ったやり方ができているから
	福祉に関わる軸	自分がその仕事をする立場になったときには、その地域の枠の中で動いているので
	地域課題の捉え直し	問題とされること、課題があることによって、地域がつながるきっかけになる
	公共性と地域への貢献	そこに自分が何か貢献できるとか、その利益にもなるような仕事の仕方、関わり方
社会福祉士に必要とされる実践力	地域のつながりの良さ	与謝野町は地域の人がつながりやすい環境とか、地域の横と横、家同士といったつながりの良さがあると感じました
	地域への働きかけ	地域のつながりの良さを生み出したり、その環境に関わっていくこと
	地域課題の発見	もっと小さい地域の中で、どんどん話してもらったら、その地域の中で起こっていることがわかる
	地域のネットワーク	もっと大きな枠組みにつないでいく
	社会資源の開発	相談に行きやすい環境を作れる、作っていく
	新たな関係やつながりの創出	その事業をしたことによって、これまで関わり合えなかった人同士が繋がれる、新たな関係を作り出す
	連携	地域住民を真ん中にして、人や施設がつながる

ですけど、そんな感じではなくて、皆さん生き生きしているな」という《ものの見方の変化》、「この人障害者だからって言ったり、健常者だからっていったり、そういう壁がやっぱりあると思うんですけど、入ってみたら面白い楽しい」という《価値観の変化》を経験していた。さらに、「(スタディツアーの中で) 孤独死とか、高齢化率とか、年金の支え方とかいろいろ話の中でありましたけど、過疎化の話も現実的になってきていたり、特に年金なんかは若者が払う・払わないの問題もあつたりするので、自分のこととして考えないといけないなって。そういう現実味のあることから目をそらすことができなかつたし、何かしらそういうことに関心をもっていけるのは良かった」という《社会課題への関心の高まり》を経験していた。

(2) 【大学で学んだ知識と実践の統合的理解】

【大学で学んだ知識と実践の統合的理解】カテゴリは、《地域の人々と暮らし》《地域における施設の役割と機能》《施設と地域のつながり》《他の分野・領域の業務や支援》《社会福祉士の業務》の5個のサブカテゴリから構成された。

「地域として移動が難しく、高齢者の方々が集まるっていうのはそもそも大変」という《地域の人々と暮らし》、「それでも地域の高齢者の方々がそうやって集まって、体を動かしつつ、お互いができるようになったこととかを刺激し合いながら、コミュニケーションの場にもなっていて、結果的にいろんな機能が一つの場所で集約されて、それで成り立っている」という《地域における施設の役割と機能》を理解していた。また、「(今まで行ったことがなかった) 認知症デイに行ったんですね。そこにおばあさんが4人ぐらいと職員さんがお喋りされていて、隣にはカフェがあって、そこで一般の方と利用者さんが話す機会がある、人づきあいがある」という《施設と地域のつながり》。「(実習では行くことができなかった) リハビリの施設に行ったんですけど、(利用者さんの) 水分摂取量をミリリットル単位できっちり測っていて、その理由も聞かせてもらって、医療の支援の様子を知ることができた」という《他の分野・領

域の業務や支援》、「福祉で“連携・連携”って言いますが、(実習が終わった後も) ちょっとぼんやりとよくわからない感じだったんです」「あることが一時間の面接で決まるのか、日頃のやりとりの中で決まってくるのか、そういうこともわからないわけなので」という《社会福祉士の業務》について、「与謝野町に来てみて、中に入って見ることができて、“なるほど、こういうことで話に繋がりがあつたんだ”ってリアルになって」というように、大学の授業や実習で学びきれなかつたことについて「実際に中に入ってみることで、実感として理解できた」経験をj得ていた。

(3) 【実践者としての態度・価値観】

【実践者としての態度・価値観】は、《与謝野町の福祉のまちづくりとその効果》《実践者としての態度》《地域の個別性の理解》《福祉に関わる軸》《地域課題の捉え直し》《公共性と地域への貢献》の6個のサブカテゴリから構成された。

「与謝野町の地域の人と接する中で、満足度が高そうだなというのは見ている感じでした」「与謝野町に住んでいてよかったみたいな感じがしましたし、そうやってずっと地域でいられるっていうのは、やっぱりいいなと思います」というように、参加者たちは、スタディツアーを通して《与謝野町の福祉のまちづくりとその効果》を感じていた。また、《与謝野町の福祉のまちづくりとその効果》は、「ちゃんと町のことをわかつて、この活動をしよう、こういう人のためにこういう施設を作ろう」という《実践者としての態度》、「その地域に合ったやり方ができているから」「逆に与謝野町のやり方をほかの自治体が真似したとしても、多分うまくいかないのではないか」といった《地域の個別性の理解》によって実現されているとらえていた。

さらに、「自分がその仕事をする立場になったときには、その地域の枠の中で動いているので」として《福祉に関わる軸》が意識されるとともに、実践者としては、「地域の良いところだけじゃなくて、こういうところもある」というネガティブな見方を、「問題とされること、課題があることによって、地域がつながるきっかけになる」とリフ

レーミングして「地域課題の捉え直し」、「その人が住んでいる地域とか生活っていうのをしっかりわかった上で」〈地域の個別性の理解〉、「そこに自分が何か貢献できるとか、その利益にもなるような仕事の仕方、関わり方」〈公共性と地域への貢献〉をしていくことが必要だと考えていた。

(4) 【社会福祉士に必要とされる実践力】

【社会福祉士に必要とされる実践力】のカテゴリは、〈地域のつながりの良さ〉〈地域への働きかけ〉〈地域課題の発見〉〈地域のネットワーク〉〈社会資源の開発〉〈新たな関係やつながりの創出〉〈連携〉の7個のサブカテゴリから構成された。

「今回“地域に根付いた施設の強さ”というものを感しました」「与謝野町は地域の人がつながりやすい環境とか、地域の横と横、家同士といったつながりの良さがある」「つながりの良さがあることが、社会福祉の支援においては大切だと思いました」というように、参加者たちは〈地域のつながりの良さ〉に着目し、「地域に協力できる関係〈地域のつながりの良さ〉があれば、地域としても強くなれる」ととらえていた。

その上で、「〈地域のつながりの良さ〉を生み出したり、その環境に関わっていくこと」〈地域への働きかけ〉、「(家庭の話とかそういう話を)もっと小さい地域の中で、どんどん話してもらったら、その地域の中で起こっていることがわかる」〈地域課題の発見〉、「もっと大きな枠組みにつないでいくことができる」〈地域ネットワーク〉、「福祉の事業としてそういうこと(地域の人が遊びに来るからいろんな話を聞ける等)をやっていけるとか、相談に行きやすい環境を作れる、作っていく」〈社会資源の開発〉、「その事業をしたことによって、これまで関わり合えなかった人同士が繋がれる、新たな関係を作り出す」〈新たな関係やつながりの創出〉、「一つの法人だけでできることには限界があると思うので地域間の〈連携〉、地域が一体となった〈連携〉」「地域住民を真ん中にして人や施設がつながる」〈連携〉は、社会福祉士に必要とされる実践力だと捉えていた。

3. 考察

インタビューの分析の結果、「スタディツアーよさの」の教育効果について、以下のことがいえる。

①スタディツアーを通して、〈ものの見方の変化〉〈価値観の変化〉〈社会課題への関心の高まり〉を経験するなど、【自己の変容】がみられた。

②スタディツアーを通して、〈地域の人々と暮らし〉〈地域における施設の役割と機能〉〈施設と地域のつながり〉〈他の分野・領域の業務や支援〉〈社会福祉士の業務〉について、【大学で学んだ知識と実践の統合的理解】が得られていた。

③スタディツアーを通して、〈与謝野町の福祉のまちづくりとその効果〉や〈実践者としての態度〉から、【実践者としての態度・価値観】を感じ取っていた。また、自分自身が実践者としてどのように福祉に/地域に/地域課題に取り組み、関わっていくのかという「福祉に関わる軸」についても意識して考えられていた。

④スタディツアーを通して、〈地域のつながりの良さ〉〈地域への働きかけ〉〈地域課題の発見〉〈地域のネットワーク〉〈社会資源の開発〉〈新たな関係やつながりの創出〉〈連携〉について、【社会福祉士に必要とされる実践力】としてとらえていた。またコロナ禍の実習で課題となっていた〈地域への働きかけ〉についてもその重要性を具体的に考えられていた。

従って、「スタディツアーよさの」の実践では、①学生が自己を見つめ、多様な視点から物事をとらえる力を身につけることを促進する、②大学で学んだ知識と実践の統合的理解を促進する、③実践者としての態度・価値観を身に付け、将来、福祉にどう関わるかという「福祉に関わる軸」の形成を促進する、④社会福祉士として必要とされる実践力の獲得・形成を促進する効果があったと考えられる。

V. おわりに

今後さらに効果的なプログラムとして、開発・実装に取り組んでいくために、本実践の成果と今後の課題について、次にまとめることとする。

第一に、コロナ禍において、学生と福祉実践の

現場の関わり合いが難しい状況の中で、「スタディツアーよさの」を展開できたことは成果である。これまで、コロナ禍の実習を経験した学生からは「地域との関わりが学べなかった」「連携について学びたい」等の声があがっていた。また実習を今後に控えつつも、コロナ禍により施設見学等をできていない学生からは、「利用者との関わり合い」や「実践の体験」を希望する声が寄せられていた。そうした学生のニーズに対し、本プログラムを提供できたこと、さらに地域住民や実践者との対話や関わりを通じて、大学で学んだ知識と実践の統合的理解をはじめとする数々の効果が示されたことは成果であり、意義があったと確認できる。

第二に、コロナ禍の実習を経てスタディツアーに参加した学生へのインタビューによれば、実践能力の高い社会福祉士の養成教育に求められる「地域への働きかけ」や「他職種との連携」、「地域課題の発見」、「社会資源の開発」について学びを深めたことが確認できた。コロナ禍の実習において課題となっていた「地域への働きかけ」についても学べていたことから、本実践は、社会福祉士の養成教育の補完や機能拡充に貢献できたと考えられる。

第三には、今後の課題として、学びの質に関わる内容である。スタディツアーの限られた時間の中で、いかに学生の学びを有効なものとするか、例えば、本実践では、事前学習、小グループでのミーティングや交流の場の設定、現地及び事前・事後指導を通してのシェアリングや振り返りを行ったが、今後はそれらの回数、時間、内容等が適切であったかどうかを評価して、修正していくことが必要である。また、社会福祉士の養成教育への貢献を考えていくのであれば、ソーシャルワーク実習の状況と連動させた的確なニーズ把握のあり方や有効なコンテンツの具体化も検討される必要があるだろう。

第四に、関係者への効果検証の課題である。本実践は、行政、福祉実践者、地域住民が協働しての取り組みである。学生側の効果だけでなく、受け入れ地域や様々な立場の関係者にとっての効果や課題も検証する必要がある。この点については、与謝野町関係者へのインタビュー等を進めていき

たい。

最後に、インタビューの中で、「参加して良かったことは、やっぱり地域福祉っていいなって思ったことです」という学生の語りがあった。将来の福祉の担い手不足が大きな課題とされている現在、教育と実践が地域レベルで体系的・一体的に展開できる仕組みやプログラムを構築・開発していくことは、社会福祉の魅力を広く伝えていくとともに、持続可能な地域社会と人材の育成に貢献できる可能性が考えられる。

謝辞

新型コロナウイルス感染拡大の第7波の渦中にあった2022年8月5日、「スタディツアーよさの」が実施できたことは、ひとえに与謝野町関係者の支援と熱意、そして参加者の意欲によるものである。第7波の渦中にあっても、万全な感染対策を講じて、学生を受け入れ育てて下さろうとする与謝野町の皆様、京都府関係者の皆様、同時に、「実践から学びたい」という強い思いと意欲をもって、そして社会的責任を自覚し、対策を万全にして参加してくれた学生に心から感謝申し上げたい。

※本教育プログラムは、2022年度 京都府健康福祉部「京都府北部福祉フィールドワーク事業」を活用して実施したものである。

注：

「京都府北部福祉フィールドワーク」事業

福知山市、舞鶴市、綾部市、宮津市、京丹後市、伊根町、与謝野町の5市2町を含む「中丹・丹後」と呼ばれる京都府北部では、過疎化・高齢化が進み、福祉人材をはじめ労働人口の確保が深刻な課題となっている。一方、豊かな自然や地域産業の歴史を背景に、多機関の連携のもと、地域ぐるみで人々の暮らしを支える福祉実践が豊かに繰り広げられている地域である。こうした特性を活かして、京都府では「京都府北部福祉フィールドワーク事業」を実施して、京都府内の大学生等を京都府北部に呼び込むとともに、大学生等が地域の特性と人々の暮らし、地域の福祉課題、支援プロセス等について、総合的に学ぶことができる学習環境づくりを目指したプラットフォーム（つながり）づくりとして展開されている。

コロナ禍による社会情勢の変化、また福祉、医療、教

育、産業等幅広い分野で「地域」に焦点を当てた人材の養成がより一層求められる中で、2022年度より、これまでの事業内容に加え、京都府全域において、さらなる学生や市民の学びの機会、福祉の現場および仕事を知る機会、福祉の資格取得を後押しする環境を創るため産学官が協働して取り組むプラットフォームおよび仕組みとして、試験的試行的取り組みを進めている。本実践は、その一つとして展開したものである。

引用文献

- ・小久保志乃・三浦修・李在憶・佐藤貴洋・海老田大五朗・田崎基・古俣健・小山弓子・秋山詩織 (2021) 「地域支援の展開に向けた社会福祉士の視点と役割に関する一考察－社会福祉士へのインタビューから－」『新潟青陵学会誌』14 (2), 22-33 頁。
- ・厚生労働省 (2021) 「地域共生社会とは」厚生労働省ホームページ『地域共生社会のポータルサイト』
<https://www.mhlw.go.jp/kyouseisyakaiportal/#tiikikyosei>
(最終アクセス日 2022年9月25日)
- ・厚生労働省社会・援護局福祉基盤課福祉人材確保室 (2019) 「社会福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」厚生労働省
- ・日本ソーシャルワーク学校教育連盟 (2021) 「新型コロナウイルス感染拡大に伴う社会福祉士・精神保健福祉士養成課程への影響等 2021年度第1次緊急調査結果(暫定版)」2021年9月8日
http://jaswe.jp/novel_coronavirus/doc/2021_1st_corona_tanshu_20210908.pdf
(最終アクセス 2022年9月25日)
- ・社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会 (2018) 『ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割等について』厚生労働省
<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000199561.htm>
(最終アクセス日 2022年9月25日)
- ・一井崇 (2019) 「ユニバーサルツーリズムの新たな視点と地域形成における障害者雇用の役割－京都府与謝野町「よさのうみ福祉会」の障害者雇用・就労支援事業を通じて－」日本観光研究学会『観光研究』31 (1), 19-32 頁。
- ・狩野 剛 (2022) 「コロナ禍のなかでのフィールドワーク学修報告～「地域づくり」の学びから学生の得たものは何か～」『福島大学地域創造』33 (2), 59-75 頁。
- ・小久保志乃・三浦修・李在憶・佐藤貴洋・海老田大五朗・田崎基・古俣健・小山弓子・秋山詩織 (2021) 「地域支援の展開に向けた社会福祉士の視点と役割に関する一考察－社会福祉士へのインタビューから－」『新潟青陵学会誌』14 (2), 22-33 頁。
- ・黒田学・青木一博 (2014) 「地域に根差した障害者福祉の取り組み－京都府与謝野町におけるよさのうみ福祉会の地域連携－」『立命館産業社会論集』50 (3), 163-171 頁。
- ・草平武志・内田充範・宮崎まさ江・勝井陽子・角田憲治・永瀬開 (2021) 「地域共生社会の実現に貢献する福祉専門職養成のための新たな演習プログラムの構築」『山口県立大学学術情報』14, 23-46 頁。
- ・京都府健康福祉部介護・地域福祉課 (2018) 「京都府北部福祉フィールドワーク実践報告集」京都府
- ・中西 典子 (2013) 「過疎高齢地域の産業と福祉をめぐる小規模自治体と事業者との連携(上)－京都府与謝郡与謝野町における調査研究をもとに－」『立命館産業社会論集』49 (1), 69-82 頁。
- ・日本ソーシャルワーク教育学校連盟 (2018) 厚生労働省平成 29 年度生活困窮者就労準備支援事業費等補助金(社会福祉推進事業分)「実践的社会福祉士養成教育のあり方と地域を基盤にしたソーシャルワーク実習の基盤構築に向けた開発的研究事業」実施報告書
- ・日本ソーシャルワーク教育学校連盟 (2019) 厚生労働省平成 30 年度生活困窮者就労準備支援事業費等補助金(社会福祉推進事業分)「包括的相談支援及び地域課題解決体制を担うソーシャルワーク人材養成・育成体制の構築並びにそのパイロット事業の実施に関する調査研究事業」実施報告書
- ・越智紀子「2020年度コロナ禍における相談援助実習の教育評価」『花園大学社会福祉学部研究紀要』第30号 2022年3月 13-27 頁。

参考文献

